

## 意見交換の概要 (平成 29 年 9 月 7 日(木)・松山大学)

### 1. 県単位・市単位で考えるまちづくりについて

僕は、大学では専門でインフラ整備とか社会デザインコースで、まちづくりについて学んでいて、将来は、出身の四国中央市をより良い町にしたいなと思っている。知事は以前市長もなさっておられたので、県単位で考える良いまちづくりと、市単位で考える良いまちづくりの違いであったり、逆に同じ点だったりを教えていただきたい。

#### 【知事】

あの、厳密に言うんですけどね、役割が違うんですよね。大きな行政単位で言えば国、県、市があるんだけど、まず、今のこの日本の国に長年定着しているありようそのものが、もう限界を来していると言っていると思うんです。実は 10 年以上前までは、県ってすごい中途半端だったんです。ほとんどの地方の政策も国が決めてたんです。国っていても役人さんが決めてたんです。国土交通省とか文部科学省とか霞が関に役所があるじゃないですか。そこが自分たちのエリアの政策は地方も含めて考えますと。毎年それが各地方に送られてくるわけですよ、メニューが。受け取った我々は、僕はそのときやってないですけど、地方がですね、地方は人口規模や産業構造や地理的条件全部違いますから、じゃあ、その示されたメニューの中で、自分の町はどれがいいのかなっていうのを選んでたんです。選んで実施に移すっていうね、一言で言えばメニュー選択行政っていうのが実態だったんです。現実的に市町のレベルで、自分たちでお金を徴収して、自分たちの裁量で行える事業っていうのは 38% ぐらいしかなかったんです。ああ、もうちょっとあったか、43% ぐらいかな、ちょっとそれは微妙。県はですね、自主裁量権 20% しかなかったんです、当時の。今もっとありますけど。そして、これを加重平均していくと、30% は自主裁量権ということで、三割自治っていう言葉が生まれたんです。日本の地方行政の正体は 3 割だと、三割自治っていうのが当時の定番だったんです。

ところが、2 つの理由でこの体制にメスが入りました。1 つは国のお財布事情。もう絶対に借金しちゃったんです。今、国債発行残高 1 千兆超えちゃってますから、多分どうやったら無難に返せるかなんて答えを持って人、今この世の中にいないんです。何とかするんじゃないかっていうぐらいに進んじゃってます。とりあえず、これ以上増やさないように頑張ろうっていうぐらいの段階でしか今やってないんで、ちょっとこれは深刻な問題なんです。その中で国は何を考えたかっていうと、もう財布事情がこんなだから、地方のことまでは考える余力がありません。これからは、地方は自分たちでやってくださいっていうことを言い始めたんです。国の台所事情から発せられた後ろ向きな要因に基づく地方分権という流れが 1 つ出てきました。一方、地方のほうでは、これまでの体制だと四国中央市にだって特色があるように、どこの町にも歴史もあり文化もあり産業構造もある。その特色をどう生かすかがまちづくりの腕の見せどころなんです。ところが、三割自治の世界では、それができないんですよ。何やるにしても国にお伺い立てて、これは全国共通のこれしか認めないってやられちゃうから、金太郎あめみたいなことしかできなかったんだ。どこの町行っても同じようなものが出来上がっていく。それは駄目でしょうということで、地方のほうからは、我々は独自のまちづくりをやりたいんで、権限と財源、国から地方に移せと。地方の側からは、極めて前向きな要因を持って地方分権の流れが出てきたんです。全く動機は違うんだけど、方向性だけ一緒だったんです。地方分権で。そこで 10 年前からパーッと地方にお金に移るようになりました。まだ、中途半端ですけど。その中で、じゃ、どういうことになってるかっていうと、本来だったら国は外交、安全保障、福祉の基本、教育の基本。もう、ここに特化して国政で議論して言えばいいわけですよ。それ以外

のことについては、地方に委ねるといようにしたらいいんです。そしたら、国会議員ばっさり減らせるんですよ。これは、ちょっと、僕は減らしたほうが良いと思ってるけど。

地方がですね、市町は皆さんにとって最も身近な役所。生活に関わるテーマを扱う役所なんで、基礎自治体と言ってます、基礎自治体。県はどういう役割を果たすかっていうと、1市ではできないような問題もあるんですね。例えば、ごみの広域化の処理をどうするかとか、先ほどの消防体制を協力体制でどう構築するかとか。これは広域行政というふうな実現になりますんで、そこにね、上下関係はないんですよ。僕らもよく言うんですけども、何となく日本人の頭の中にね、村よりも町が上、町よりも市が上、市よりも県が上、県よりも国が上みたいな、何となくそんな意識があるんですよ。これ全くありません。なくしていかないといけないんですね。あくまでも役割分担をしている水平の関係なんだということで、地方の在り方を考える必要がある時代に入ってきてると思いますんで、今までの感覚とちょっと違ってきてると思うんですね。

その中で、四国中央市の、まず市がですね、自分たちの特色をどこに見だし、どこを磨いて、どんな町をつくるかって、まずビジョンをつくる。その次に、県がそれはいいですね、でも、横と、例えば、東予に行くんですけど、産業は違いますけれども、共通の財産もあるんですよ。これね、山岳ですよ、山。石鎚山から住友の銅山のあった赤石山系から四国中央市の翠波高原まで、これはね、最高のトレッキングコースなんですね。もう西日本有数のトレッキングコース。それは四国中央市だけではインパクトが弱いんで、その後は連携して磨き込んでいくとかですね、いろんなことやる必要がある。そのときに県がどんどん出ていきますんで、しかもそれは決して上下関係ではなく水平関係の中で、お互いがウインウインになろうというふうな形で今進めているところなんで、愛媛県ではその流れを先取りして、6年前から愛媛県と県下20の市町の県・市町連携推進本部会議っていうのを常設して、連携のやり取りが常に議論できるような組織をつくって臨んでいるところです。

**(参加者)**

今の質問とは別なんですけど、資料を置かせていただいているんですけど、一番端っこのです。8月のユニバーシアードに参加させていただいて、してきた活動をちょっと紹介させていただいてるんで、もしよかったらまた後で目を通していただけたらと。

**【知事】**

はい、了解です。ちゃんとみきちゃんも持っていつているんだね。

**(参加者)**

そうですね。愛媛のアピールと日本のアピールをしてきたので。

## 2. しまなみ海道等へのシェアバイク制度の導入について

先ほど、知事はしまなみ海道の自転車による観光の取組みに力を入れているとおっしゃっていましたが、私は今治市出身で、昔に比べて自転車のホームページや設備が整ってきたと身近に感じている。最近、中国で人気のシェアバイクの企業、モバイクや ofo(オフオ)という2社が日本の市場に参入してきたと思うが、それをサイクリストの聖地であるしまなみ海道や、愛媛県を先ほどサイクリングパラダイスにするとおっしゃられていた、そちらのほうに何か導入するというか誘致するっていう考えなど持っていらっしゃったら教えていただきたい。

**【知事】**

そうですね、このシェアバイクっていうのは、ちょっと中国で広がっている制度とですね、台湾で広がっている制度っていうのはちょっと違いがあって、中国で広がっているシェアバイクっていうのは、かなり乗り捨てというものを自由にやるという色合いが濃いんですね。だから、あの方式が定着するかどうかはまだちょっとクエスチョンマークなんですね。むしろ注目している

のは、台湾の台北市を中心に行っている YouBike(ユーバイク)っていうね、自転車レンタル制度のほうが、日本ではフィットするんじゃないかなっていうふうに考えてます。ただ、これは実は市のまちづくりに関わってくるんで、今治市がやるのかどうか、松山市がやるのかどうか、そこを見て愛媛県も協力しましょうっていう形になるんで、我々は情報だけ提供してるんですね。こんなこと台北でやってますよ。こんなことやってますよっていうのは両市にはどんどん出してますね。ただ、今治の人口規模だと、ちょっと難しいかもしれない。50 万ぐらいいないとですね、シェアレンタルがポンポン使われるとこまでいくのかなっていうところがあるんで、ちょっとそこは分析が必要だと思います。

じゃあ、一応台湾で一体何が行われているかっていうと、YouBike っていうのがあって、町のいたるところ二百何十カ所にステーションがあります。そこにオレンジ色の 3 段変速の YouBike っていうのがカシャカシャカシャと並んでいるんですね。カードをかざすと、初乗り 30 分までは無料だったかな。それ以外はお金がかかるんだけど、全てカードで決済もできるようになってますね。プリペイドカードみたいになってますから。乗ります。ちょっとあそこまで自転車で行こうと。かざしたらカシャーンと鍵が開いて乗ります。スマホをいじります。二百何十カ所、いたるところにステーションがあって、今どこのステーションに空気が何台、行ったらすぐ止められる場所が何台あるかって、そこで全部見えるようになってるんですよ。そうすると自分が行きたい場所で一番近い場所、空気があるところを選んで、そこに向かって走っていくと。そこにガシャッとやると、またチャリンって自動的に鍵が閉まると、これが町の至るところにあるんですよ。一番利用してるのは大学生ですよ。もう自分たちの足になってるんで、それはシステムのすごい良くできてるんで、スマホのシステムと連動させている形も、もう完成形なんでね、どうかなっていうんで、つい、今年か、松山市と今治市には紹介をしました。今、検討はしてると思いますけど、うちが強制的にやれっていうわけにいかないんで、さあ、どうしますかっていう段階ですね。

### 3. ビックデータ等の集客への活用について

提案であるが、その台湾の方式で、今東京都でドコモ、NTTドコモが取り組んでやってると思うが、愛媛県でもそれをビックデータという形で、誰が今どの時間帯にどういうところに行っているのかというのを活用すれば、より観光であったりとか市民の経済を回すに当たって、活用できると思うので、またそちらの面もお考えいただければと思う。

#### 【知事】

はい。その視点はね、これからの分野で、特に AI の活用をこれからどう展開していくかっていうこと。例えば、名古屋のタクシー会社は、既にタクシーに AI を活用してるんですね。数年の名古屋の人の移動のデータを分析し、どの場所でタクシーが拾われたか時間帯の分析をして、確率論の世界だから、そこが AI が瞬時に計算をして、過去のデータ、ビックデータに基づくと、この時間はあの場所に行ったほうがお客さんがつかまる可能性が高いっていうことで、マップ上で指示を出すわけですね。ここへ行け、あそこへ行け。実際にそれをタクシーが導入してやったら、売り上げ 3 割上がってるんですよ。だから、今言ったような別の活用法になると思いますけど、これ AI をどう活用するかっていうのは、実は僕らの世代ではもうちょっとついていけないんで、県の若手職員に今プロジェクトチームを立ち上げてもらって、各部局から若手が集まって、AI をどう県の行政に活用できるか勉強して提案してくれというふうな作業を今やってる最中です。

#### 4. 県内の歯科技工士確保に向けた県の支援について

僕は今歯科技工士を目指して勉強しているが、今愛媛県で歯科技工士を目指す人たちが減少している傾向にあるのをお伝えしたいなと思って来た。

今年の7月に厚生労働省から歯科技工士に関するデータが発表されたが、平成18年から28年の10年間で50歳以上の方が30%から50%に増加した一方で、20代の若者が16%から11%に減少しており、今愛媛県内でも、25歳未満の技工士が21名しかいないという現状になっている。また、今僕が行っている技工士の学校でも、入学者が20年前と比べて3分の1にまで減少するなど、だんだん減っている傾向にある。

そんな中で、平成24年から白い歯に保険が導入された。その白い歯はパソコンでつくるものであるが、やっぱりパソコンを使ってというのは、僕たちみたいな若い世代のほうが柔軟に対応できることもあり、本当に若い人が必要であるが、その若い人がだんだんいなくなっている。若い人が愛媛にいないと、これから愛媛県内で患者さんが銀歯とか入れ歯つくりたいなと思って県内につくれる人がいない、じゃあ、中国とか海外に出しましょうというふうになってしまう可能性がある。この大変なときに行政の御支援とかサポートなどをしていただき、愛媛県の皆さんに笑顔を届ける歯科技工士がまた増えていったらいいなと思い、発表させていただいた。

#### 【知事】

正直言ってこの歯科技工士さんという世界のシステムとか、そこに対しては僕は細かく知ってるわけじゃないんで、無責任なこと言えないんだけど、基本的には今全国至るところで人手不足という現象が同時に起こってます。歯科技工士さんだけの話じゃなくて、介護士もそうですし、看護師さんもそうですし、これさっき言ったようにどだい若い人が少なくなってきたんで、全ての分野で現象が起こってると思うんですね。

その中で、多分次の時代に考えなきゃいけないのは、やっぱり外国人の方々の確保。いないですからね。どれぐらいいなくなったかっていうとですね、一番1年間に日本人が多く生まれた年、赤ちゃんが一番多く生まれた年って年間に270万人生まれてたんですよ。今、多分君たちの世代は100万人ぐらいでしょう。100万人から110万人、3分の1になっちゃうもんね。だから、絶対数が少ないんで、かつてのようあらゆる分野に人材が確保できるかっていったら、これは無理になってきてますから、そうはいつでも必要な分野もたくさんあるわけで、日本は割とその部分が若干排他的になってるね。例えば、介護士さんなんかでも、現場ではそう多くの日本語力が必要ではない。ある程度のコミュニケーションが取れば十分できるんだけど、なぜ増えないかっていったら、試験を日本語でしかやってなかったから。これを実は英語、あるいは現地語可にしたら、瞬く間にみんな受かっていくレベルにきてるんだけど、あえてそれをやらないわけ。というのは、何となく分かるでしょう。外国人をできるだけ入れないような施策が日本って、鎖国の名残でもないんだけどもあったんですよ。でも、これからはそうは言われてられないんで、本当に優秀な希望のある人材をですね、海外からもどんどん来ていただくようなですね、政策転換を図っていかないと間に合わないかなというふうに思います。

それから、歯科技工士のことについていえば、歯科医師会や歯科技工士会が鍵を握っていると思うんですね。やっぱり歯科医師会がいて歯科技工士会がいて、その元で一緒になってやっていきますから、その歯科医師会や歯科技工士会からのアプローチっていうのがひとつ大きな力になるんじゃないかなというふうに思うんで、そこはちょっと覚えておいていただけたらというふうに思います。

何か、現場からあります。歯科技工士のこと、詳しい人います。誰もいないの。ごめんね。そういうことで。

## 《補足説明》〔保健福祉部〕

県では、平成 26 年度から、国の地域医療介護総合確保基金を活用し、県歯科技工士会に対し、歯科技工士及び養成所の学生を対象とした離職の防止及び非就業者の復職支援に係る研修会の補助を行っています。

## 5. えひめ国体・えひめ大会終了後の県の取組みについて

私は、社会共創学部の中でもスポーツ健康マネジメントコースに所属しており、先ほど知事がお話しされたえひめ国体・えひめ大会については、かなり関心を持っている。現在、県のプライオリティとしては、少子高齢化の問題であったり、津波・防災対策の問題だったりすると思うが、現段階では、やはりえひめ国体・えひめ大会の成功が一番のプライオリティであると思っており、その中でボランティアの募集であったり、えひめ国体チャンネルをつくって選手のインタビューを放送で流したりとか、この前拝見させていただいたのが、県議会の参加者が全員みきゃんのポロシャツを着ているのを見て、県全体でえひめ国体・えひめ大会に向けて機運を高めていっているというのが印象にある。

しかし、えひめ国体・えひめ大会の成功がゴールではなく、えひめ国体・えひめ大会は愛媛県のスポーツ事業の発展であったり、スポーツ人口の増加やスポーツに携わる人の増加を図るための 1 つの機会、チャンスであるように思っている。国体が終わった後に国体の勢いをどのようにつなげるかというのが、県の課題になってくるというふうに思っているが、知事御自身がえひめ国体・えひめ大会が終わった後に、スポーツに関わる機会だとか意識を維持していくために、何か考えている活動・取組みというものはあるか。

### 【知事】

まず、スポーツっていうのは、もちろんする楽しさがある。それから、見る楽しさがある。それから、応援する楽しさがある。それから、支援する楽しさがある。いろんな楽しみ方があると思ってます。それらをうまく組み合わせれば、人と人の心もつながっていきますし、また、地域の健康づくりにもつながるかもしれないし、また、郷土愛にもつながるかもしれないし、いろんな要因が詰まってると思うんですね。だから、スポーツっていうのは、非常に重視した政策をこれまでも取ってきたつもりですし、これからもどんどんやっていきたいと思っています。

実は、国体っていうのはまさにその言われるとおりにきっかけにすぎなくて、幸いなことにえひめ国体の 3 年後に東京オリンピックもありますし、また、国体っていうのはですね、3 つのアプローチが必要なんですね。1 つは国体の各競技協会が認定する施設を整備するっていうことですね。2 つ目は大人数、大人数が来県されますから、それをどうおもてなし、迎え入れをするかという問題。3 つ目が選手の強化という問題。こういったものを 3 方向から追い求めてきたのが国体への取組みでした。

施設はほとんどできてますんで、これを使わない手はないと。国体以降はですね、例えば、来年もうほぼいけるかなと思ってるのが、この施設を活用してくださいということで、全日本大学対抗テニス王座決定試合。これは東京の有明でやってただけども、オリンピックの工事で使えないという情報をキャッチしたんで、たまたまテニス協会知り合いがいたんでアプローチしたら、ほぼオッケーだということで、2 週間ぐらいやるんだね、この大会。全国の大学生らが集結する大会やったりですね、要は施設を活用すれば全国大会とか、あるいは強豪チームの合宿とか、あるいはラグビーの、これできるかどうか分かんないよ。ラグビーワールドカップの事前合宿だとか、オリンピックの競技別の事前合宿とか、こんな施設があるんですよ、もう既について言えば、その可能性が十分あるんで、どんどん活用の幅を広げていきたいなというふうに思ってます。

それから、もう1つはもっと長い目で見てるんだけど、3年前にえひめ愛顔のジュニアアスリート発掘事業っていうのを始めたんですね。これは将来に全国のトップや世界を狙えるような選手を早い段階で発掘しようっていう事業なんだけど、何をやってるかっていうと、誰でも手を挙げられるんです。小学生、中学生対象で。チャレンジしたい人って言ったらワーストきて、だいたい毎年3,500人ぐらい来ます。そこで体力測定します。500人になります。もうそれは完全に能力主義で運動神経で500人残ります。その後、第2次選抜でまた絞り込んで、最終的に80人から100人ぐらいになります。この子らを対象に1年間アスリート育成プログラムを組みます。どの競技に向いてるかはその時点で分からないんで、走る、跳ぶ、打つ、投げる、組む、いろんなことを全部経験してもらいます。その段階から各競技会のスタッフも入ってもらって、この子はこの競技をやればトップ目指せるとか見えてくるんですね。1年かけてそれを見極めてアドバイスをします。アドバイスは何かって強制ではありません。もし、あなたがこの競技にいったら世界に出られるよとかね、可能性が出るよっていうアドバイスをします。でも、その道に行くかどうかは自分で決めてくださいというふうなことを今3年目に入ってるんですけど行ってます。御両親にもアスリートをサポートするための栄養学であるとか、そういうのも講座として指導していくんですけど、何を狙ってるかっていうと、やっぱり愛媛県からオリンピックとか出たら盛り上がるじゃないですか。世界大会出てくる子たちが出てきたら盛り上がるじゃないですか。そういうのをね、やっぱり育成してスポーツのひとつの何と言うかな、顔みたいなね、役割を果たしてもらいたいなというのが1点。

それから、施設がありますから、さっき言った全国大会やいろんな世界的なものを引っ張ってくるのが2点。

それから、さらにそういう施設がやっぱり整備されて、いつも使ってるわけじゃないですから、地域、地域で拠点の種目を育成する仕組みができたらいいなと思ってますし、また、そこに世代を超えた人たちが参加することによって、人々の健康増進にもつながればいいと思ってます。

例えば、松前町に今度ホッケーの会場ができました、新しく。グラウンドホッケーの専用の施設です。松前町今どうしてるかっていうと、もう日本国内でのホッケーのトップレベルの指導者を雇いました。松前町役場で今職員になってます。それが小学校、中学校、これからどんどん教えていきます。松前町から全国クラスのホッケー選手を育ててホッケーのまちづくりをするんだって、こういう話になってますね。西条は西条で今度クライミングの施設ができました。オリンピック競技にも入ってますよね。このクライミング競技を小学生のうちから指導体制をつくり上げて、クライミングの世界的な選手を育てようっていうまちづくりをしようと、こういう機運が出てきてますね。

だから、これは市町も腕の見せどころだと思いますけども、今言ったような、する、見る、支援する、応援するというスポーツが持つ本来の魅力をさらに輝かせるように、国体が終わって天皇杯・皇后杯取ってくれば、みんなが盛り上がりますから、スポーツに投入する政策に県民の理解が一層広がるんで、いろんなことやりやすくなるんで、そのためにも天皇杯・皇后杯を取ってほしいというふうに思ってます。

#### **(参加者)**

ジュニアアスリート発掘事業については、私も何回かスタッフとして携わらせていただいて、先ほど知事のお話も聞いて、今後も機会があれば積極的に参加しようかなと思います。

#### **【知事】**

ぜひ、ぜひ。

## 6. えひめ国体・えひめ大会のボランティア参加者に対する競技審判の募集について

えひめ国体・えひめ大会のボランティアに参加された方に、競技審判の募集をしたらどうか。私自身も大学に入ってから陸上競技の審判を始めて、やはり審判をすることによって、今まで当たり前できていた、大会をアップしてレースに出るという流れが、いろんな人の支えがあってできるんだなというのをすごく感じている。そういう意味でもスポーツをするだけではなく、支える人の存在っていうのがすごく大事だということに気付いた。審判員が不足しているという現状もあり、ボランティアの方に実現可能かどうかは知識不足なので言えないが、もし、ボランティアの方に審判の募集ができれば、今後、愛媛県のスポーツ事業もより発展していくのではないかなと思う。

### 【知事】

これは審判の資格が競技によって全然違ってくるんで、しかもものによっては国内A級とかC級とか国際ライセンスとか、ものすごく細かく分かれてるらしいんですね。例えば、体育協会が国体がボランティア参加者に、もし興味があったら審判資格を受けませんかという、その種目ごとにアプローチするっていう手はあるかもしれない。ボランティア全体にいったら、ちょっと難しいかもしれないな。

### (参加者)

やはり専門知識も必要としますので、難しい部分あると思うんですけど、審判を取得するために、学ぶ段階においてもスポーツに触れる機会っていうのができてくると思うので、私の1つの提案として触れさせていただきました。

## 7. 四国新幹線開通後の沿線住民の利便性について

私は、地域公共交通に関することをテーマに卒業論文を今書き進めているので、四国新幹線についてお伺いしたい。

2016年に北海道新幹線が開通し、新幹線がない地域がいよいよ四国だけということ、この前、四国新幹線整備促進期成会というのを立ち上げ、積極的に誘致をしようということになっていると思う。四国新幹線が開通することによって、特に関西圏に住んでいる方々の観光誘致だとか、ビジネス出張がしやすくなるのではないかなというふうに言われていると思う。新幹線が開通すると、県外の方々は愛媛県に来る所要時間が短くなったりして、来るのが容易になってくると思うが、一方で住民の方々、沿線住民の方々は、並行在来線が廃線または縮小化されて第3セクターだとかいうふうな方法に変わって、むしろ利用しにくくなるっていう懸念材料があると思われる。実際に北海道新幹線や北陸新幹線が開通されたときには、並行在来線が第3セクター方式だとか私鉄化され、少なからず公費も入ってくると思う。四国新幹線が開通されたときにも、住民の方々が便利に鉄道を使っていく方法というのをお考えなのか、知事の御意見を聞かせていただきたい。

### 【知事】

はい、四国新幹線というのは今手挙げてすぐにできるって話じゃなくて、恐らく20年ぐらい先、それ以降になると思うんで、ただ、今手挙げなかったらチャンスはないということになります。やるからにはB/Cって、投資に見合うリターンがちゃんと確保できるのかどうかっていうのを詰んでいかなきゃいけないし、その点荒の計算ではある程度このルートだったらいけるなっていう計算も出てるんで、それで踏み込んだ取組みにつながったんですね。

何でもう1つやらなきゃいけないかなと思ったのは、じゃあ、新幹線のない場合、どうなるかっていうことを考えると、多分JR四国は存続不可能になると思います。JR九州も新幹線なか

ったらアウトだったと思います。新幹線の開通に伴って、そこに主力の事業体収入が生まれて、事業体として存続できるめどが立ってきたんだけど、今のまま新幹線を全く考えないで在来線だけ残せばいいということになると、JR 四国っていうのはもう企業としては成り立たなくなる可能性が生まれてきます。そのときに、回避する方法っていうのは、前は国鉄が分割民営化して現在の姿に至ってるけども、再度こうするか、それか新幹線という事業で柱となる収益源をつくるかしかない。だから、将来、全体の鉄道をまず並行する在来線の問題を抜きにして、鉄道会社として存続させるために新幹線の事業は絶対に必要だというふうに判断してます。

既に例えば過疎地域であるとか、そういうところについては、これはバスも含めて公費が入ります。それは、足として確保しなければいけないし、これは山間部であるとか島しょ部の船であるとか、鉄道であるとか、こういったところには公費を入れて足を確保するっていうことは、これは致し方ないことだと思います。ただ、そうはいつでも、ただ単に指をくわえてるだけじゃ事態は良くならないんで、最近では観光列車であるとか、そういった取組みも、スピードが速くなればなるほど遅いものに対する憧れっていうのは人間っていうのは持ち始めますから、そういったところの仕掛けっていうのを在来線でどう生んでいくかっていうのが、知恵の見せどころになってくるんじゃないかなというふうに思ってます。

## 8. JR 予土線の活性化について

前回 JR 四国の記者会見のときに、今後 JR 北海道のように路線維持困難地域が出てくるので、どのようにして維持していくかっていうことを地域の方々と話し合っていかなければならないっていうふうにおっしゃっていたが、県として、路線維持困難地域をどのように維持したりだとか、活用していくっていうようなお考えは今現在持っていらっしゃるか。

### 【知事】

ちょっと具体的にこの路線って言うていただいたほうがいいんだけどね。どこのことを言うてるのかな。

### 【参加者】

そうですね、主に過疎地、具体的な路線言いますと予土線だとかのほうが比較的収益が悪いということで、路線が維持が困難になるんじゃないかっていうふうには言われてると思うんですけど。

### 【知事】

あの、たちまち今やっぱり愛媛で問題なのは予土線だと思います。高知との境のね。ここについては予土線利用促進対策協議会というのをつくって、JR も含めていろんな試行錯誤をしてるんだけど、そもそも人口が少ないんで、本当にこれがいつまでこの状態の中で存続できるか。さっき言った新幹線がない以上は余裕がないんですよ。このまま放置していたら最悪のケースもあり得るかもしれないんで、そうならないようにどうするかっていうのを今詰めて、やれることはやると。

例えば、伊予灘ものがたりもそうだったし、予土線 3 兄弟っていう新幹線みたいなね、あれも結構話題を呼んで集客にもつながってるんで、そこに南予の観光振興策っていうのを今から展開していくんで、それに鉄道利用が当然出てきます。例えば、なかなか進んでないんだけど、南予に行く列車については、通勤・通学の時間帯を除いて、もう自由に自転車が乗せられるというぐらい大胆なことやってみたらどうかって提案してるんですよ。それは JR 側の言い分では前例がないとか、あるいは車内に事故が起こったときに誰が責任を取るのかっていう、そういう問題じゃなくて、海外、アジアなんか行ったら、簡単にそのサイクルトレインっていうのがね、どんどん走る時代に入ってますよと。そうするとね、愛媛県全体サイクリングコース今つくってるわけ



だけれども、そこに至るまでの移動手段としてJR鉄道が使えるようになるわけですね。

だから、そうやって需要をつくり出すっていうふうなことをやしないと、じり貧になるのは明らかなので、県は県の立場で、県が進めている観光政策と鉄道をどうリンクさせればいいのか、その結果として、鉄道の利用が増えるためには何をしたらいいのかになっていうのは、常に提案していきたいと思っています。

## 9. 児童虐待への対策について

保育科で学んでいるので、子どもに関することに気になることが多く、児童虐待に関することとお聞きしたい。愛媛県の児童相談所の虐待対応件数が、2015年度は718件で2016年が803件と1.12倍増えている。虐待ということが全国的にも認知されることが増えた結果、対応件数が増えているというのもあると思うが、実際に虐待を受けている子どもが増加していることも含まれているのではないかと思っている。虐待といっても、身体的な虐待だけではなくて、精神的なものであったりとかネグレクトとか、さまざまな可能性があると思うが、その中で一番の解決法としては、周囲の人間が気付いて対処したり、相談したりとかということだと思う。県として、そういう虐待についてどういう考えを持って、どういう対策をしていっているのかをお聞きしたい。

### 【知事】

はい、虐待っていうのはやっぱり何らかのシグナルがあると思うんで、今話があったように、そのシグナルをより身近な人たちが早い段階でキャッチができるかどうか極めて重要だと思うんですね。何で難しくなってきたかっていうと、やっぱりライフスタイルの変化と価値観の変化、これが背景にあると思います。例えば、昔だったら3世代同居とか、そういうね、暮らしが多かったですけども、核家族化が進んでそういう3世代同居、世代を超えた支え合い、相談相手の状況っていうのが弱くなってきた。もう1つは、特に松山市で顕著に見られるんですけども都市部でね、コミュニティの崩壊ですね。隣の人は何やってる人かも分からないというような状況が生まれます。

例えば、ここ何校区だっけ、東雲、味酒。東雲か。味酒校区っていうところが隣にあると思うんですけども、ここは実はマンションがどんどん建って、人口減少してるんですけど校区で見るとすごい増えているんですね。1万9千人ぐらい、多分今はいると思います。ところが地域のコミュニティはものすごい逆で、問題になったのは消防団の成り手がいないんでね。1万9千人もいて消防団は当時、当時松山市の仕事してたときに危機的状況だったのが、消防団員が18人ぐらいしかいない。もう全然地域のことは知りませんというふうな、新住民の集団になっちゃったんで、これは県というよりは市のときにやったことなんだけど、やっぱりコミュニティを復活させなければ、今の児童虐待のメッセージをキャッチすることも、それから、地域の安全を守るための消防団の活動も、あるいはお年寄りの見回り等々も含めてですね、そういったサポートの力が弱くなってしまいうんで、どうすればコミュニティ復活できるのかなっていうのを当時考えたんですよ。地域の運動会とか文化祭とか公民館という拠点でいろんな仕掛けをしてるんですけども、そこには来ないんだよね。地域の行事があるといつも同じ人しか来ないんですよ。新しく来た人は何か敷居が高いのか、そもそも面倒くさいのか来ないんですよ。だから、これをいくらやっても限界があるだろうと。

そこで当時最初に考えたのが、さっきの自主防災組織の呼びかけだったんですね。防災組織ということになれば、他人事ではなくなるんですね。自分や家族の問題になってきますから、自主防災組織で皆さんがいざというときに助かるように話しませんかという呼び掛けになると、今まで出てこない人が出てくるようになったんです。そこでまた人と人のつながりが生まれるんで、

そこからまた公民館の活動にいざなっていくという、そこがまず最初スタートだったんですね。

次に社会で起こってる問題をうまくコミュニティに結び付けようということでやったのが、不審者情報がかかり頻繁に出るような時期があったんですね。じゃあ、これは地域の子どもたちは地域で守ろうということで、青パト隊っていうのを結成して、要は地域の人たちが、みんなで力を合わせて子どもさんの登下校を見守るとか、不審者に対応するための見回りをするとか、そういう運動を起こしたんですね。これもまた今までいなかった若い人が出てくるようになりました。

第3段階で考えたのは、そもそもまちづくりも使えるんじゃないかなと。自分たちが住んでる町は自分たちで考えて、自分たちでつくっていこうという呼び掛けをしました。条例をつくったんです、当時。地域の町というのは、行政の役割と地域住民の役割と、それから、企業・団体の役割があって、それぞれが相関関係をつくりながらやっていくのが理想であろうというような条例の内容になってるんですね。強制はできないんで、まず成功例をつくろうと思って、この条例に基づいてまちづくりにチャレンジをしてみたいところどっかありませんかって言ったら、1個だけ出てきたんですよ。堀江校区というところ。じゃあ、もうそこを徹底的にえこひいきでバックアップしようということで、当時の大学生たちにも手伝ってもらって、土曜日、日曜日にまちづくりを勉強する会を、定例会をつくったんですね。当初から目標にしてたのは、1年かかろうが2年かかろうが、自分たちのこの町はどんなふうにしたいかっていうのを議論をしてくださいと。例えば、ごみの問題。子どもたちのサポートの問題。お年寄りの生きがいづくりとか、いろんな委員会をつくって、町のありようというのを住民の皆さんに考えてもらうようにしたんですね。あのときは2年かかったと思うけども、結果的に計画ができたんです。計画をつくと同時に、それを実行に移す組織が必要だということで、組織の制度設計もしてほしいということで、計画と組織ができました。ただし、この組織で大事なのは公平であるということ。例えば、対立構造が入る政治や宗教とか、そういうのは入れないと。もう公平であるというのが大前提ですよということで、公平な組織と住民自ら皆さんが考えた計画ができたら、松山市から一気にお金を渡しますとあって、そこに渡すようにしたんです。その範囲の中で、計画変更も自治単位でどうぞやってくださいと。例えば、こっちはやっぱり重視したいからここを削ってこっち回そうとかいうのは、もうそれは住民の皆さんで自由にやっていいですよという、まちづくり条例に基づく地区まちづくり協議会っていう制度をつくったんですね。これをやっていくと、やっぱりかなりの人たちが参加するようになるんですね。さっきの安全、安心、見守り隊なんかも出てきますから、まさにいろんなことが起こったときの初期段階におけるキャッチがしやすくなる。全ては言ったように地域のコミュニティというものが鍵を握っているんじゃないかなというふうに思ってます。

こんな事件もありました。埼玉で起こった事件けども、全くコミュニティがないですよ、そこ。関東だからそんなとこなんでしょうね。全国のテレビニュースに出ただけで、90歳近い2人のおばあさんが、姉妹が住んでいたんです。そこに怪しげな人たちがしょっちゅう出入りしてるのはみんな知ってたんです。でも、誰も声を掛けない、つながりがないから。結局何でニュースになったかっていうと、家の改修、シロアリ駆除とか改築とか、そういう怪しげな業者が、要は横の連携であのばあさんとこ行ったら金取れるぜとあって、次から次へと入り込んで何千万円という財産を失った。そのときにニュース見てたら、隣近所の人たちインタビューに出てくるんだけど、どうだったんですかって言ったら、いや、みんなね、あそこの家、怪しげな人が出入りしてるの、あれみんな知ってたんですけどね、でも、付き合いがないからって、これで終わってるんですよ。もし付き合いがあったら、多分その犯罪は防げたと思うんだけども、まさに子ども虐待も同じだと思いますから、地域のコミュニティってのは一番の鍵を握ってるというふうに思ってます。

## 10. 愛媛の活性化及び産業の育成について

私の学校は松山市主催の学生による政策論文で最優秀賞をいただいたり、また、地域活性化の松山活性化コンテストでもグランプリと市長賞をいただくなど、地域活性化について考え取り組んでいる。先ほども知事のお話の中にあつた人口減少と少子化が進むことで、地域の産業などが縮小、衰退していくと考えられるが、愛媛の今後の活性化、育成についてどうお考えか。

### 【知事】

はい。まず、学生政策論文募集ってすごい懐かしくて、僕が市長に就任した2年目に始めたんですよ。学生と勝負だとかいってね、どれだけ施策提言できるかやってみようっていうんで立ち上げた事業が今でも続いているんだね。

### （参加者）

そうです。

### 【知事】

ああ、それはもう本当におめでとうございます。

さっき地域経済のところで触れたんだけど、産業育成すると愛媛の場合はですね、やっぱり日本全体そうなんですけど中小企業が多いんですよね。この中小企業やあと1次産業ですね、いいものをつくってる。素晴らしい技術を持ってる。でも、中小であるがゆえに営業力が弱い。だから、そこをサポートするのが新しい県の経済政策だっているのが営業本部という政策だったんですね。

何をやってるかっていうと、やっぱりいいものじゃなきゃ売れないんで、まず最初、技術から入ったんですね。ここに愛媛が誇る「スゴ技」データベースっていうのがあります。これがその最初のツールとしてつくったもの。愛媛県内にある高い技術力を持った企業全部調べて、公平な立場の審査員を募ってその審査にかけて、この技術は通用するという判定を下したらここに載るようになるんです。これは愛媛県庁の営業部隊が常に持って携行して回ってますから、ただで、その営業はなされていくという仕掛けになってるんですね。だから、知られてない企業がいっぱいあるんですよ。エンド製品をつくっている企業は皆さんも名前をよく聞くとするんですけども、パーツとか部品をつくってる会社っていうのは、エンド製品としては世の中に出てこないんで知られてないんですね。

例えば、この中には、そうだな、愛媛県、これは新居浜市にある会社なんだけど、大きな歯車、減速機と言ってます。歯車をつくってる会社があるんです。この歯車何に使われているかっていうと建設機械、建設機械のコンボの根元に大きな歯車かみ合わせてパワー出したりっていう、そういう歯車をつくってるんだけど、この会社誰も知らないんですけども、世界の建設機械の30%でこの会社の部品が使われています。それから、四国中央市にあるアルミのサッシの会社。ここはね、東京スカイツリーのアルミ、全部その会社がつくってます。それから、松前町だったかな、面白い会社があったの。段ボールを機械に入れたら自動的に組み立てる機械をつくってるんですね。これは日本のほとんどのシェア持ってた、宇和島のほうへ行くとパーティークラッカー。2社あるんだけど、この2社で日本の国内で出回ってるパーティークラッカーの7割のシェア持ってます。

そういう特殊な技術をここに掲載して、我々が、例えば、東京の大手の会社や、それから、今、海外は、もともと商社にいたので、ランクを付けてターゲットゾーンを明確にしています。それは、政情が安定しているということ、経済発展が著しいということ、日本食や日本文化に関心があるということ、技術を求めていること、こういうのを濃淡を見極めて、例えば、第1ターゲットゾーンがシンガポールと上海と台北。第2ターゲットゾーンがインドネシアとマレーシアとベトナム。第3ターゲットゾーンがフィリピンとミャンマーとかですね、それを順を追って攻めてまし

て、たまたま僕がいた商社の同期たちが各国の責任者になってるから、こんなもんだで使うしかないというんで、それを愛媛県の中小企業に結び付けていくっていう事業をやってます。要は売り上げをサポートすることによって、安定したビジネスが海外の商圏で確保できるっていうところもやっていかなきゃいけないと思ってます。

それから、もう1つ大事なことは技術の後押しです。これは食べ物も含めて。例えば、愛媛県の県庁の組織の中には、食べ物でいえば魚の水産研究センター。牛肉、豚肉の畜産研究センター。鶏肉の養鶏研究所、農業全般の農林水産研究所。ミカンだけをやってるみかん研究所。全部、多分皆さんの大学の先輩たちだろうけども、技術職として入って日々研究をしています。その研究の主たる目的は、収益を上げられるブランド品の開発と、それから、生産におけるコストダウンの技術の追求、この2つなんです。それから、自分の趣味で研究しちゃ駄目よ。生産者にフィードバックできるような研究成果を上げてくれるっていうことで、それぞれがいい刺激をしながら、収益がもたらせるようなサポートを研究機関がやっています。

技術のほうも同じで、例えば、四国中央市は紙の町なんで紙産業技術センターがあります。今治はタオルの町なんで繊維産業技術センターがあります。中予には産業全般をやる産業技術研究所があります。砥部焼とか瓦をバックアップする窯業技術センターがあります。それから、木材を研究する林業研究センターがあります。ここも大事で県の職員が技術職として入って、その産業の後押しをしてるんだけど、例えば、新技術をどれだけ早くものにできるかっていうのも生き残るための大きな条件になってますよね。そこで民間の力も借りて、例えば、さっきの東レさんとか帝人さんは炭素化合物の先端産業の技術を持ってるわけですね。ここと既存の愛媛県の金属とか鉄の加工技術を炭素化合物の加工に応用できないかっていうことで、大学も含めて3者連携、民間と行政と大学と3者連携で、その新しいビジネスのモデルがつかないかっていうことを、まあ、百何十社参加してやってますね。それから、新しい技術としては、紙の町ではセルローズナノファイバーっていうね、紙でありながら鉄の5倍の強度を誇る、もう紙が出来上がってるんですね。これをどう今後の産業に生かすかっていう研究を、これまた大学と民間と行政、県庁で一緒になってやっています。それから、今度西条に新しく立ち上がりますけども、木材についてはCLTという新しい素材、これ海外ではもう標準化されてるんですけど、日本では、まだ認められてないんですよ。もうすぐ認められると思います。今までの木材っていうのは縦に合板していったんだけど、これを縦横、縦横にすることによって、強度がものすごい増すことが分かったんですね。これCLTって言います。海外ではこの木造CLTを活用した木造で10階建てまで認められてるんですよ。日本はまだ3階建てまでしか多分認められないと思うけど、これが認められたら、一気に木材の需要が増えるわけですよ。愛媛県は木材の産地でもあるんで、こういう新しい分野に先手、先手を打っていくことによって、既存産業の生き残りの道を模索するっていうのも、愛媛県の仕事かなというふうに思ってます。

## 11. 愛媛を世界に発信するデザインやクリエイティブについて

知事は、デザインやクリエイティブな面で、市長の時代から活性化に取り組んでこられたとちょっと伺った。私も今デザインの勉強をしており、今後の愛媛を世界に発信したり産業を発展させていく中で、そういったクリエイティブな面が必要になってくると思うが、知事はそういうデザインやクリエイティブに対して、どのようなお考えをお持ちか。

### 【知事】

分からない。僕は正直言ってデザインは大の苦手なんです。キャッチコピーとかね、そっちのほうは結構得意で、自分でつくったの結構実現しちゃって、今度「スゴ技」とか「すご味」データベースとか「すごモノ」データベースって僕が考えてやっちゃえ、やっちゃえってつくったや

つなただけど、そういう発想はどんどん出てくるんだけど、実際デザインを描く、最も苦手なんですよ。もう学生時代から図工とか絵、美術、すごい成績悪くて、だから、それはもう才能ある方にお任せするしかない。ただ、出てきたものを、これいいねって直感的に見極めるといってところだけは磨いておけばいいのかなと思ってますんで、ぜひ、いいものをどんどん出してください。

## 12. Uターン就職者に対する奨学金の返済支援について

先ほどの講話で人口流出のことがあり、それについての提言であるが、Uターン就職者に対する奨学金の返済の支援について。例えば、県内だと新居浜が最近工業に関して、ちょっと限定はあるが、あと、宇和島だとか。県は、医学部生への支援を知事が最近やってらっしゃると思う。県外だと、三重県とか徳島県、例えば、徳島だったら、徳島出身であるかどうか問わず、もう徳島に就職してくれたら奨学金の返済の支援をするというのを、もちろん定員はあるがやっていて、愛媛もそれをやったらどうか。もちろん、県外へ出て帰って就職した人全員に対して奨学金の支援をやるっていうのは、財源に関して無理であるが、愛媛で働いていて、どうしても返済できないという状況には誰しも陥る可能性はあるので、一律に愛媛に就職してくれたら奨学金の支援をするのではなく、返済が滞るとか、返済しながらだと生活が苦しいという場合には県が支援する。もちろん基準はある程度厳しくしていいと思うが、やっぱり就職して今後奨学金を返していくという不安は誰しも持っており、本当に困った場合には返してもらえという安心感を与えることで県内に就職してもらうことは大いにあり得ると思うので、御検討いただきたい。

### 【知事】

あの、キャッシュを渡すっていうのは、もう最後の手段だと思うんですね。そうやれば効果はあるのは見えているんだけど、やっぱり打ち出の小づちを持っているわけではないんで、さっき言ったように何もかも無料とかやると、行きつく先は財政破綻になってしまうんで、やっぱりやるとするならば、効果的にターゲット決めてやるっていうことが必要だということと、それから、お金の問題になりますから、やっぱり条件っていうのは納税者が納得するような使い方しないとイケないんで、例えば、今年度から奨学金ただになりますって、じゃあ、去年の人って我々どうしてくれるんやと。今までまだ払い続けた我々はどうするんじやと、絶対問題が起こってくるんですね。ですから、なかなかそこは一斉にっていうわけにはいかないなと思ってます。

さっきちょっと触れていただいた医学部の学生は、実は愛媛県がやってるんですね。これはもう本当に地域医療が崩壊すると。これも理由があったんだけど、平成18年に、それまでは研修医の先生方っていうのは、各地域に割り振ってまんべんなく行ってたんです。ところが平成18年から自由選択になったんですね。そしたら、研修医の行く場所はみんな東京とか大病院に集結して、地方から人が一斉にいなくなったんです。それで、地方で医師不足という問題が浮上したんです。これが原因になってるの分かっているのに、国はその間違いを、間違いといつかね、この政策がこういう状況をつくったんだよって認めないんですよ。ここが悪いとこなんだけども、だから、そこがカバーできない限り、この状況は続くだろうという判断をして、当時僕の前の知事さんがまず産声を上げて奨学金制度っていうのを医学部、地域医療が崩壊してしまうんで、条件をこれは付けてます。これは県外でもいいんだけど、愛媛大学医学部に入って医師免許を取得後は最低9年間県内で働いていただく。県内のお医者さんをやっていただくということを条件に奨学金免除やっています。8年だったら全額回収します。それぐらいやっぱり厳しい条件をやると、議会も通るし、県民の皆さんも納得していただけるんで、今のところこれでもうすぐ第1期生が世に出てきますんで、最大で160人ぐらい愛媛県内に今の奨学金を活用した医師を誕生さ

せると。その子たちが南予とか東予とかいろんなところに散ってやってくれるんで、少なくとも愛媛県は平成三十二、三年ぐらいから急速に、地方、愛媛県の地方における医師もある程度出せるようになるかなというふうに思ってます。税金が原資ですから、今言ったように結果、中身、そういうのを詰めながらやっていけば、こういうときはいいんじゃないかなというのが出てくるかもしれないんで、やみくもにっていう考えは今のところはないですね。だから、そういう条件次第ということで回答とさせていただきたいと思います。

それともう1つね、就職ということに関しては、もう1つ今仕掛けをしているのが、例えば、こういう「スゴ技」データベースに載ってる企業っていうのは、世界で戦ってる企業たくさんあるんですよ。でも、その存在はエンド製品つくってないから知らないと言いました。地元においてもその存在知らないんです。知らないから社会に出るときに東京、大阪に目が向いてしまう。えっ、こんな会社があったのっていうのを早い段階で、多感な青年期に知っていたら、いや、これ世界で戦ってる会社、地元にあるんだったら、就職の選択肢にしようっていう子たちも増えてくるんじゃないかなというふうに思って、これの中学生版とかどどんつくってですね、中学の段階で職場体験とかどどんやって、先生にもその地域にどんな企業があるか勉強してくれと。その存在を知ってもらうということを徹底的にやるっていう事業を今起こしてます。かたっ苦しい名前の事業だと食い付き悪いんで、さっきのネーミングじゃないんだけど、これは僕が考えたんだけど、どういう事業名にしようかっていう話がきたんで、えひめジョブチャレンジU-15 という事業にして、ぜひ、来てくれと。結構皆さん、中学生の食い付きが良くてですね、これからそういうものを知って、知ることによって就職時の選択肢に入ってくるっていうのが1点。

もう1点は東京、大阪に行っている学生さんたちを引き戻すということで、どうせ1回は古里帰ってくるんだらうと。じゃあ、そのときに愛媛県と企業が主催する合同就職説明会、これに出席してくれと、帰省のときに。その帰省のときに、この就職説明会に参加してくれるのであれば、それを条件に、ちょっとせこいんだけど片道だけ交通費出してやると。片道交通費支給っていう制度を2年前から行ってます。そういうものをあの手この手で考えながら流出を食い止めたり、いろんなことしていききたいなというふうに思ってます。

### 13. 文化や歴史に力を入れた教育について

私は今大学で日本語を専攻している。その授業の中で、愛媛県の方言には奈良時代の言葉、おらぶっていう、叫ぶっていう意味の方言があるが、奈良時代の言葉が含まれており、それは全国的にもとても珍しいことだと知った。私はずっと松山に住んでいるが、大学に入って日本語を専攻するまで知らなかった。今の中学生は、そのことをもっと早く知っていれば、愛媛の方言にも興味を持てるなと思った。そのように文化や歴史に力を入れた教育について何かしていこうとお考えか。

#### 【知事】

そうですね、これは実際やったことがあるんですけども、これも松山市長時代の話になるんですが、坂の上の雲のまちづくりっていうのを仕掛けたんですね。正直言って平成11年の段階なんでドラマ化も決まってるんです。なぜ、それに目を付けたかっていうと、やはりこれはもう愛媛松山の文化だと思ったんですね。だから、坂の上の雲っていうのは、司馬遼太郎さんっていう人が書いた作品なんだけども、主人公は松山市出身の人たちで占められているということもあって、実はビジネスマンの必読書になってるんですよ。どうしてそうなったのかっていうのは組織論とかいろいろあるんですけども、僕は東京の丸の内っていうところで働いてたんですけど、そこに丸の内書店っていうのがあって、10年連続売り上げ1位を重ねてたんですね。ですから、ビジネスマンにとっての必読書っていうことは、多くの方々に知られていると。でも、地元帰っ

てくると誰も触れないと、こういう状況だったんですね。何ともったいないと。当時 1998 年に文芸春秋社と朝日新聞社がほぼ同時に、あなたが 21 世紀に残したい小説は何ですかという各界、各層のアンケート調査を発表したんだけど、両方とも坂の上の雲が 1 位だったんですよ。でも、愛媛では語られないと。ましてやその主人公の一人である秋山好古さんは、旧北予中学の校長先生を務められていて、北高出身。当時は、今知らないけどね、当時の北高は秋山さんのことは先生から誰も聞いたことがないっていうわけ。なぜならば軍人という側面があったから、何か怖いんじゃないかっていう、そういうイメージだけで拒絶するっていうような風潮もあって、北高ですら触れないという、こんな状況が続いたんですね。

司馬さんっていうのは昭和 30 年代に松山に来て、2 カ月正岡子規を調べに来た。正岡子規を調べていくうちに、同級生に秋山真之がいて、そのお兄さんに秋山好古がいるということを知る。3 万人ぐらいの田舎町で、そこには夏目漱石まで加わって、東西一流の文化人たち、あるいは軍人として歴史に名を刻んだ、こういう青春群像があるっていうのに驚いたわけ。それに興味を持ってもっともっと調べていくと、やっぱり当時の明治人の生きざまというものに関心を持って、明治時代の青春群像を書こうと決意をして坂の上の雲っていうのが生まれてくるんですね。あくまでもあの小説で司馬さんが伝えたかったのは明治、開国をして初めて日本人という意識を持って、それまで鎖国されてるから藩の人間という意識しかなかったわけよね。日本人という意識を持って海外に負けない、外国に負けないいい国をつくろうという共有した目標に向かって歩いていく明治人の生きざまをメッセージに託したんですね。だから、司馬さんは生前、この作品だけは映像化させないっていう遺言を残したんです。映像化されてしまうと日露戦争の話かっていうふうに捉えられてしまうんで、それは自分の思いとは違うんだというんで、そのまま亡くなってしまったんですね。

その後に坂の上の雲のまちづくりをやったらほとんど無反応でした、最初。でも、外であれだけの評価を受けていて、あれだけのファンを持ってるんだったら、絶対に輝くはずだっていうんで、しつこく、しつこくやっていったら、それに共感する人もたくさんいましたから、だんだんだんだん広がっていったんですね。司馬遼太郎さんの奥さんがまちづくりでの使用はさせないって最初は言ってたんだけど、2 年間通ってこちらの熱意が伝わって、松山のまちづくりで使用してもいいっていうことになって、それでまちづくりを始めた翌年に奥さんがその気持ちを変えられて NHK にドラマの許可を下す。あのドラマは 3 年にわたって放送されてるんですよ。大河ドラマではなくて 21 世紀スペシャルドラマという枠でつくってます。通常の大河ドラマは 1 話 45 分で、予算が 5 千万円って決まってるんですね、NHK の。坂の上の雲は 1 話 90 分になります。90 分掛ける 13 話で、90 分 1 話の予算は幾らかかっていうと、大河ドラマが 45 分で 5 千万。90 分だったら普通 1 億だと思ったんですよ。4 億 2 千万掛かってます。二度と許可下りないんですよ。1 回きり。だから、あそこの作品には信じられない人が脇役で出ているんですね。もう二度とつくられないの分かっているから、頼むから出させてくれと。ちょっと変な話、主役の本木雅弘君や香川照之さん。特に香川照之さんっていうのは本当に思い出があって、脚本を書いたのが野沢さんという人なんだけども、書き終わった後、自らの命を絶ってます。そのときに遺言でメモが残っていて、坂の上の雲の映像だけはどんなことがあっても完成してほしいと。自分の書いた脚本の中で正岡子規を演じられるのは香川照之しかいないと。それ以外の役者では無理だというメモが残ってたわけです。NHK はそれをしっかり受け止めて香川さんに打診して香川さんになってるんですね。本人もそれを知った上で演じてます。だから、鬼気迫る演技をやってるんですね。

これらの全て松山の歴史、文化を形成してるから、坂の上の雲がドラマになったときは、もう一気にワーッとなくなったんですね。それを忘れてしまうのか、継続していくのかは次の世代の話なんで、その価値っていうのは文化っていうのは忘れられたら何と言うかな、消えていくの早いんですよ。でも、その価値をしっかり受け止めて語り継ぐ人がいれば輝いていきますから、ぜひ、愛媛県全体のね、文化を大事に見つめて伝えていく役割を果たしてください。

## 14. 社会福祉士が活躍できる場について

人間健康福祉学部の中で私は社会福祉専攻で勉強している。福祉といっても、高齢、障がい、医療、地域、児童の主に5つの分野があるが、私は特に児童の分野に興味や関心を持ち、ゼミの活動においても児童分野で積極的に児童養護施設や児童自立支援施設など、多くの子どもたちと触れ合っている。いろいろ学習してきた。この子育てについて、先ほど講話の中でもあったように出生率が低下しているというところで、1つとして出会いの場が少なかった、出会いの場というのと、経済的な問題もあるが、この2つの理由よりも、やはり心理的なケアといったものが大事ではないのかなと思っている。実際この児童虐待、先ほどお話もあったが、全国の速報値が最近出て、12万件出ているが、なぜ虐待に発展してしまうのかというのは、子育てに関するストレスを誰にも話せないというようなことで社会問題として虐待問題に発展しているんだということだと思うが、それに関しては地域のコミュニティをしっかりとつくっていくというのが大事と思うので、ここの部分の質問は先ほどしていただいたので、差し控えさせていただく。では、例えば、家庭の問題に対して誰がやるのかというところで、ここは、社会福祉士という役割が非常に大事だと思うが、一般就職と比べると、なかなか求人が少ないという状況である。福祉の就職の中でも、恐らく、福祉は高齢者とか障がい者っていうイメージが非常に強く、求人においてもまた高齢者、障がい者というような求人は多いが、地域とか児童の分野に関しての求人は非常に少ない。

社会福祉士がもっと活躍できる場が今後増えていければ、この児童虐待に関する問題といったようなものは解消できるんじゃないかというふうに思う。これから福祉は非常に大きな課題であり、必要な問題だと思うので、この社会福祉士といった人たちが活躍できる場をつくっていただきたい、その点についてお話を聞かせていただきたい。

### 【知事】

ちょっと県に社会福祉士の資格ってどれぐらいいるのかな。人事いないからわからないか。

ちょっと僕もそこら辺詳しくないんで、無責任なことは言えないんだけど、実はこの相談、ストレスを抱えてね、相談できなくてストレス抱えるというのは感じているところなので、各、これは市・町も含めて相談体制の窓口っていうのは結構整備が進み始めてはいるんですよ。ただ、若い世代っていうのは、そうはいつでも敷居が高い。さっき話した、じゃあ、アプリっていうものを活用すればより気安く相談に応じてくれるのではないかなと。そこから、直接の質問であるとか、直接の悩みとかにいきなっていけば、相談体制っていうのはよりステップアップできるんじゃないかなというのも考えたんで、きらきらナビっていうアプリケーションを一昨年、これつくるに当たっては、それこそ社会福祉士の方や学校の先生や専門家みんなに集まってもらって、どういう情報が大事なのか、どういうアプリケーションにすれば使い勝手が良くなるのか。これは思い付きで全然やってなくて、かなり専門家の皆さんの意見を集約してつくり上げたアプリなので、ぜひ、1回見てもらいたいなというふうに思います。

ちょっと具体的に社会福祉士さんが、じゃ、例えば、行政の立場で何人どうのこうのっていうのは、今の段階で僕が言う権限もないんだけど、もちろんそういう体制の中で人事のほうです。社会福祉士の専門家が要だというふうに判断すれば、当然そういう枠というのは出てくると思いますので、今何人いるかちょっと分からないぐらいなんで、ちょっと回答にはならないんだけど、そんなことできらきらナビだけはぜひ見ていただきたいと思っています。

### (参加者)

そうですね。あと1つ、自分たち学生も地域とのつながりが大事だと言いながら、学生たちがなかなかそういう活動ができてないということで、ちょっと僕も11月上旬にゼミの活動として、ファミカフェという名のもとに、子育て中のお母さん方とか地域住民の方々とか専門職の方々を



大学でお呼びして、悩みや相談や意見を共有し合って、家庭問題は家庭だけじゃ解決できないねみたいなことを、地域で支えていく必要があるよっていうことを、大学としてちょっとちっちゃな規模ですけど伝えていきたいなと思いましたので、これから後輩たちにもしっかりと伝えていこうと思います。

## 15. 愛媛の中高生へ地元の観光地を具体的に伝えることについて

先ほど、愛媛のスゴ技などを愛媛に住んでいる人が知らないというお話があったが、愛媛に住んでいる人は、自分たちも住んでいる地域の観光について知らない人が多いと思う。愛媛で観光地といえば道後温泉くらいしかぱっと思い付くものがないと思うので、そういう観光についてなども中学生などのときから授業で話したり冊子を配ったりして、もっとみんなが知れば、観光アピールしていくことにもつながるし、地元で愛着が湧けば、就職のために愛媛に帰ってきたりしてくれる人が増えると思うが、今現在、具体的に観光などを中学生や高校生などに伝えるためにやっていることなどあるか。

### 【知事】

そうですね、これはね、結構ね、小さな市や町のほうが進んでるんですね。コンパクトだから人口はそんなに多くないんで、例えば、小学生が観光PR隊を結成して、いろんな勉強をして、具体的・対外的な活動をしたり、高校生でもそうだな、一番活発なのが宇和島水産高校なんかはフィッシュガールっていうのをつくって、マグロの解体ショーを全国、世界まで付いてきてくれるから、宇和島の魚をアピールしたりですね、小さなところのほうが本当そういう活動が見えます。特に南予地域は大きな産業があるわけじゃないんで、1次産業と観光なんですよ。アクセスが今まで悪かったので、その点ハンディがあったんだけど、高速道路が宇和島まで通じたんで、これからは伸びしろがあるということで力を入れています。

観光っていうのを考えたときには、まず、見るというね、それはもう建物でもいいし、自然でもいいし、見る視点と、それから、食べる食文化。食べるという視点と、それから、体験。この3つが鍵を握ってると思います。見るということについては地域ごとにだいたいコンテンツ見えてきてますんで、松山だけで考えないほうがいいかもしれないね。愛媛全体で考えたほうがバラエティーにとんで、いろんな多様なメニューが用意できると思います。食べることについていえば、これはもうどちらかっていうと南予のほうが強いかなと、特色としてはね。東予に行くとな、四国中央市と今治という食べ物でポッと浮かぶものってあまりない。四国中央市何だっけ、何。

### 【参加者】

霧の森大福。

### 【知事】

霧の森大福ね。これは特別だよ。新居浜、いない。いないね、あまり買わないんだよ。南予行くと、例えば、愛南町へ行ったらびやびやがっお。これ四国で最大のカツオの水揚げを誇る深浦漁港というところがあります。カツオがあります。宇和島に行くと鯛めしが、宇和島の鯛めしがあります。鬼北町へ行くとキジがあります。松野町へ行くとモモとウメがあります。大洲行ったら芋炊きと、あそこ何だ。鵜飼いのアユ、肱川のアユですね。八幡浜行ったらちゃんぽんとかありますよね。かまぼこ。それから、伊方行くとシラスどんぶり。内子町行ったら、これはまた豊富でみんなも行ったことあるかもしれないけれど、道の駅から、からりには新鮮な、あそこはかんきつ、愛媛でありながらかんきつつくってない。かんきつ以外が豊富なのが内子町の魅力。地域ごとに食が見えるんですよ。それも地域の皆さんが知れば十分なPRになるというふうに思います。

今、さっきちらっと言ったんだけど、若手の県庁職員に頼んだのは、体験型コンテンツ探して

きてくれと。土日ボランティアでチームみんなが分かれてですね、東予行ったり南予行ったり松山行ったり、いろんなもの見てきてくれて、70 ぐらい探してきてくれました。

そこにはですね、例えば、石鎚山登ったことある人。えっ、いないの。ほんといない。ああ、そう。あの日帰りで行けるんだけど。ここはですね、西日本最高峰 1,982m さっき言いました。西日本最高峰の天狗岳に立ってるわけですよね。しかも日帰りで行ける。さらにあその面白さは鎖を登れるという面白さがあるんですね。単なる登山道ではなくて、こんなぶつとい鎖が急斜面に垂れ下がってるんですよ。4本あります。その五、六十m あったけど1本が、それをね、よじ登っていくっていうね、チャレンジが待ってるんですね。もちろんそれが怖いっていう人は迂回路に行けばいい。それを日帰りで行けちゃうという面白さがあるわけですね。

石鎚山にはスキー場もあります。冬、例えば、学生だとみんなまで共同で行かなきゃいけないけど、学生さん結構来てるんだけど、例えば、松山から車で2時間弱走ると石鎚ロープウェイに着きます。ロープウェイとスキー用具と1日リフト券のセットの割引メニューもあるんで、それだとお買い得なんだけども、そうするとですね、朝の8時に家を出れば10時には白銀の世界に立ってるわけですよ。目いっぱい滑ってお昼にカレーかラーメン食って、2時間また午後滑って帰ってくると、夕方4時半にはもう家に着いてるというね、こんな体験ができるって、他にどこにあるんねんというのをあまりにもみんなが知らないですよ。

南予に行くと、松野町にはキャニオニングというね、これまたね、とてつもなく面白いコンテンツがあって、40mのつるつるの滝が、すごい急なんだけども、そこを滑り台のようにダーッと滑って深い滝つぼにドカーンと入る。醍醐味がもうSNSで拡散されて、最初オープンしたときは年間千人しか来てなかったけど、今6千人ぐらい来てます。そのうちの7割が関西圏域の女性、若い女性です。愛南町に行くと、ヘルメットをかぶったまま空中散歩、サンゴの海を歩くコンテンツもあったりですね、もう愛媛中にね、いろんなもんがあるんですね。

今度、それを完全にこういったデータベース化して、みんなに知ってもらう機会を増やそうかなというふうに思ってますんで、ぜひ、愛媛の魅力を大学生のみんながもっと知ってもらいたいなというふうに思います。